

## 保育者養成・教員養成の造形教育に携わり、今考えること

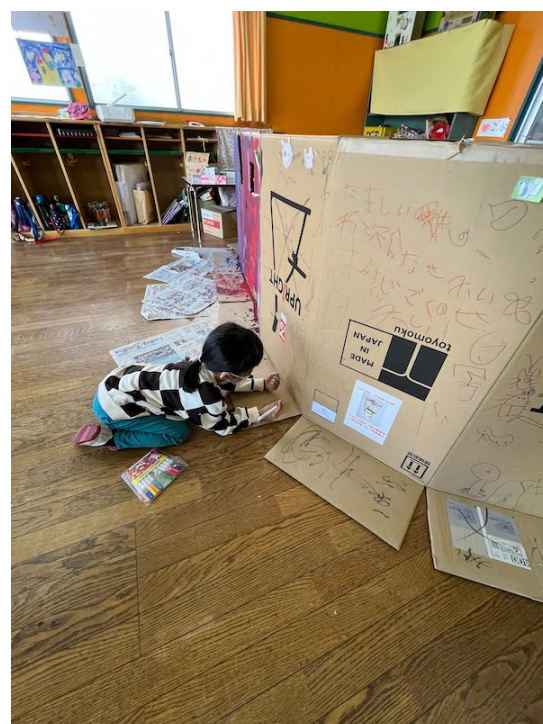
山梨学院短期大学保育科 教授 伊藤 美輝 (いとう よしてる)



### はじめに

写真は、山梨県内の幼稚園、保育所や山梨県立美術館での造形活動の様子です

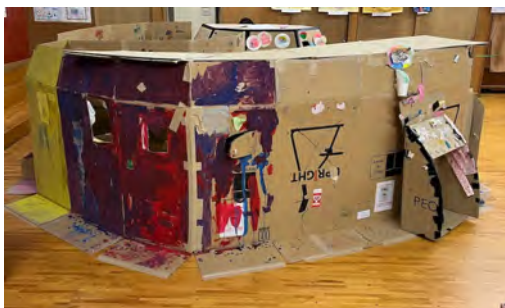
保育者養成校に勤務して45年となりました。グラフィックデザイン専攻の学生(こどもの造形活動に関心があり、アルバイトで小学生の造形活動に関わっていた、高等学校1種、中学校2種免許取得という程度)から保育者養成の現場に就職しましたので、全く保育・幼児教育の知識や経験がない状況でした。あったのは、様々な造形表現技法の体験があり、何よりその活動が楽しいものであると思っていたところでしょうか。しかしながら、その楽しいと思っていた活動は初めての授業「図画工作」の最初のところで、自らの思い込みであるという現実と直面することになりました。その思い込みとは「保育者を目指す学生であるなら、幼児の生活の中において絵を描くことや工作をすることは大切な要素で、それを生活の中で指導援助することは当然理解しており、養成校の学生は造形活動が好きであり、楽しみにしている」ということでした。授業の冒頭「図画工作は好きですか?」と問いかけると、数人の学生が申し訳



なさそうに腕を途中まで上げる状況に驚き焦りながら、「それでは嫌いな人は？」の問い掛けをしたところ、半数近くの学生の腕が先ほどとは違い真っ直ぐに上がった場面は、今も鮮明に覚えています。まさしく保育者養成校の教員となるための「洗礼」の体験でした。



これを「洗礼」と考えたのは、「自分にとって楽しい(大切・意味がある)事柄は、自分以外のものにとっては決してそうではない」と言う、これもごくごく当然の事なのですが、保育者養成と言う場において、保育者を目指している学生がそのように思っていない(そのような体験をしていない)と言う、これから出会うであろう学生の持つ、これから向き合い続けなくてはならない、重要な課題にであったと感じたからです。45年前と言うと、現在よりも小学校課程における図画工作科の授業時間も多く設定されており、当時は多くの造形体験をして入学してきたと考えられます。当然、各自の興味関心により、同じ体験をしてきてもそこには理解の差は生まれてきますが、得意不得意・好き嫌いにかかわらずそこには体験としての蓄積があったように感じます。



さて、今回ここに執筆させていただく目的は、保育者養成・教員養成の現場において絵画造形の実技を伴う授業時間が減っていることに問題点を感じたか事が根底にあります。しかし、ただ実技の授業を確保し、楽しい授業をすれば良いかということではなく、2年あるいは4年の保育者養成課程において「人の成長の初期段階における乳幼児期において造形表現の活動が、その成長にどのような意味や役割を持つのか」



を常に意識していく必要を感じているからです。乳幼児期の造形表現活動の意味につきましては、2023年2月19日に行われました「2022年度全美協造形美術館フォーラム」の「そもそも、こどもの表現ってなに?～よりよい教員養成を目指して～」において「造形活動における育ちと出会いについて」というタイトルで1時間ほど話をする機会をいただきました。ここでは、そこで触れることのできなかった事柄や、今どのような事が起きつつあり、これからの造形表現がどのような意味を持っていくのか等述べてさせていただきます。

2022年度全美協 造形美術教育フォーラム

## そもそも、こどもの表現ってなに? ～よりよい教員養成を目指して～

造形行為のはじまりである乳幼児の育ちや遊びへの理解を進めることが、こども主体の造形活動に繋がっていきます。しかし、この理解が十分に進んでいるとは言えません。そこで、全美協では、養成校と教育・保育の現場がともに高めあいなから、造形表現の主人公がこどもになるために、どうしたらよいかをテーマに「造形Well-Beingミーティング」と題し、この1年、月1回のペースで話し合ってきました。その節目として、こどもの造形活動をみんなで支えるためにフォーラムを企画しました。是非ご参加ください。

全美協(全国大学造形美術教育教員養成協議会)会長 桜花園大学 浅野卓司

日時 2月19日(日) 13時30分～17時30分 申込不要、Zoomオンライン(無料)

- 「造形をめぐる用語整理」松岡宏明(大阪総合保育大学・同大学院)
- 「0・1・2 ART — 金城大学短期大学部幼児教育学科×認定NPO法人おやこの広場あさがおー」森田ゆかり(金城大学短期大学部)
- 「造形活動における育ちと出会いについて」伊藤美輝(山梨学院短期大学)
- 「Webを中心とした発信の提案」山崎正明(元・北翔大学)



参加URL



## 1、絵画・造形に関する実技教科を取り巻く現状

養成校においては科目名の違いはありますが、私の勤務校においては「図画工作Ⅰ」15回開講(必修)「図画工作Ⅱ」8回開講(選択)が実義教科として演習形式での授業が行われています。この教科において学ぶ内容は「造形表現の基礎的な技術」「基礎的な素材の理解」「表現の楽しさの追体験(再確認)」の3つとなりますが、必修は15回のみですから選択をしない場合はその機会は減少することになります。8割は図画工作Ⅱを選択していますが、1年生の前期後期に渡り30回の授業内容から



験(再確認)」の3つとなりますが、必修は15回のみですから選択をしない場合はその機会は減少することになります。8割は図画工作Ⅱを選択していますが、1年生の前期後期に渡り30回の授業内容から

比較すると、23 回の開講であったとしても学生の造形体験の状況を考えると、3つの学びはなかなか難しいと考えてしまいます。その中で「表現の楽しさの追体験（再確認）」を先ずは学んで欲しいところであり、私のうけた「洗礼」につながる重要な要素となります

造形に関する実技（製作）を伴う教科は図画工作だけでなく、保育内容における「環境」「言葉」「表現活動」「身体表現」等にも含まれており、それらの科目において「造形表現の基礎的な技術」「基礎的な素材の理解」が生かされたとすると、学生の中での理解がより深まったことになるのですが、現状はなかなか厳しいものを感じます。私の

「図画工作」においてクレヨンの技法について学びますが、他の教科でクレヨンを使う際に、学んだはずの技法が発揮されていないことが多々あります。例えば、ペープサートを製作する際にクレヨンで彩色しても「図画工作」で体験し学んだ色の混色や重なりによる色彩表現ではなく、手軽に単色だけで着色しての利用で終わっている現状があります。こどもたちが目にし手にする文化教材は、こどもたちの表現につながる「刺激」と「モデル」としての役割を持っていますから、それを意識した製作を期待するところです。※その為には、教科の連携、同一科目内での複数の教員の連携が求められる場面です。

さて「絵画・造形に関する実技教科を取り巻く現状」をまとめると「造形表現の基礎的な技術」「基礎的な素材の理解」「表現の楽しさの追体験（再確認）」の3つの学びのうち、苦手や嫌いといった「意識」を、学生自らの体験を通じた「基礎的な技術」や「基礎的な素材の理解」の過程において、関わりと刺激から出会うことにより「体験を通じた表現の面白さ」により変換できることは、今まで出会った多くの学生からのレポートから読み取ることができます。しかし、「技法の応用」や「素材の理解」について



は、繰り返しの体験以外にその目的の達成の方法は無いのではと考えています。ですから、その機会として、養成の過程においては先に示した造形要素を持つ保育内容形系の教科との連携にかかっているとと言えます。また、発達心理学や行動心理学の観点を加えることで、その理解はより進むものと考えられます。言い換えると、学生自身が「面白い」という感覚から「どうして？不思議！」という好奇心・探究心を発揮し展開される「表現行為の内面プロセス」を「自らを教材として実感すること」が、将来の保育者として子どもの成長に携わる場面で大切な意味を持つこととなります。



「受容・共感・モデルの提示」という言葉、保育内容「人間関係」の授業を受けそろそろ定期試験が近づいてきた頃になると、学生が呟いているのをよく耳にします。保育者として、子どもたちの造形活動に関わる上での基本姿勢が、その言葉に示されています。「受容・共感」による子どもと保育者の信頼関係の構築、「モデルの提示」による出会いの提



供ということになります。この観点においては、先に触れました「2022年度全美協造形美術館フォーラム」で「造形をめぐる用語整理」大阪総合保育大学 松岡宏明氏、「0・1・2ART」金城大学短期大学部 森田ゆかり氏に続き、「造形活動における育ちと出会いについて」の中において「造形のエレメント」として示させていただきましたので、後日動画配信された際にはフォーラム全編をご視聴いただければと思います。

さて、保育所保育指針に示されている「保育士等との信頼関係を基盤に一人一人の子どもが主体的に活動し、自発性や探索意欲などを高めるとともに、自分への自信をもつことができるよう成長の過程を見守り・・・」の「自分への自信をもつこと」が今後ますます重要になることは、今さら言うまでもない事なのですが、それに強く関与する内容が総合的に造形表現の活動に含まれていることについては、養

成校の造形表現の当該教科書を担当する者として認識している必要を強調させていただくとともに、保育内容系の教員の皆さんだけでなく、保育士養成に携わるすべての教員や保育の現場にいる保育者の皆さんにも、是非理解していただければと思います。

## 2、AI時代の「造形表現」の役割について

さて、1の最後の箇所です。随分力が入った表現となりました。随分大袈裟だと感じたかも知っているのではないかと思います。ここからは現在そして子どもたちが生きていく、未来について触れたいと思います。

シンギュラリティ（技術的特異点）はいつ起きるのか？が話題になって久しくありません。1980年代からAI研究家の間で使用され始めた「人間の脳と同レベルの人工知能（AI）が誕生する時点を表す」言葉ですが、2022年にそれが起きていたのではないかという意見が出始めているようです。その根拠として、ChatGPT等の登場にその根拠



あるようです。少し前になりますが、医療分野における人工知能「IBM WatsonなどのAIテクノロジー」の活用が話題になったことがあります。数百万の医療報告書、患者記録、臨床試験、医療ジャーナルを活用して、各種のデータを集積して洞察を得ることで、治療に成功した報告等がその話題となったのですが、過去のデータから推測する役割の時点ではシンギュラリティが来たとは言われませんでした。

なぜ2022年がシンギュラリティでは！との意見が出たかということ、昨年後半からのAIの話題として「生成系AI」の登場にあるようです。歴史的な判断はもう少し先に送るとして、「表現」の観点における技術は急速に進歩してまだAIにおける「創造」の域までには達していませんが、過去の表現をデータ集積した上での表現は驚く進化をしていることは事実と言えます。

既に、アートの世界からは、生成系AIシステム（GPTやDiffusion）が「いずれアーティストの仕事を奪うのではないか」と懸念の声が出始めているようです。しかし、これは教育における「造形教育」

や「造形活動」の意味や役割にも、いずれ大きな影を落としていくと考えられます。

以前より、学生に課すレポートにおいて「コピペ」の濫用が問題になっていますが、それをさらに深刻化する ChatGPT 等のテキスト系のコンテンツ生成利用が 2022 年には話題となっています。レポート等の課題の問いに対して、生成系 AI システムにより作成されたレポートの提出です。レポートを書く本人が分かっていない分野を、レポートを書くプロセスにおいて、その分野の理解を進めていくことが重要な目的ですが、同時にテーマ向き合い考えるプロセスで自らの考え（自分自身）を知っていく事も重要な意味があるのです。課題に対して、評価される答えを出すという方法として「コピペ」の進化版としての位置付けで、今後はもっと表面化していく可能性を秘めています。考えることよりも、評価され、結果を出すことを優先し、早く効率よく行う方法として安易に受け入れられる状況にあります。

著作権などの法的な課題も、今後議論されていきますが、ここでは「造形表現」に対する観点で話を進めていきたいと思います。1 のところで、養成校の学生の造形の意識について触れましたが、学生だけでなく多くの方々は「造形を結果としての作品」として考えていると言えます。例えば「デザイン」という言葉から、多くの方々は形作られた物、製品を思い浮かべると思います。しかし「デザイン」の本質は様々な要望や課題に対しての思考のプロセスを指しています。その結果が物であり製品で、デザインされたものなのです。ここで危惧することは、今後生成系 AI システムが一般化することで、教育の分野から造形に関する教科が外されていくことが予想されるからです。そのぐらいインパクトのある存在になる可能性を感じるのは、考えすぎでしょうか？

「絵なんて描けなくても、生成系 AI に指示をすれば作品は作れるから、教科としては必要ないのでは」と言う声も上がってきそうですね。それを考える要素として、現状においても、日本において「造形表現」に関する「図画工作」「美術」といった教科はどのような位置づけにあるかということです。

最近でこそ「考える力」というキーワードで入試改革などが行われていますが、その背景には、日本の産業界経済界におけるイノベーションの為の人材育成と言うところですが、本質的な人間としての「力」として考えている状況ではないように感じています。さて美術とは違う分野になりますが、ノーベル賞

受賞者を出している某国立大学の工学部において教鞭をとっていた知人が「物づくりを小中学時代からしたことがない学生が、数学や理科の偏差値だけで入学してくるため、物を作ることに



ついて体験的に理解するために、中学生向けの電子キットなどに関わるところから始めなくてはならない状況があるんだよ」そして「物を作る過程は、上手くいかないエラーに出会い、物は壊れ、時にその過程で新たな予期せぬ出逢いの機会を作ってくれる」と退職後に話してくれたことが、とても印象に残っています。そろそろ 10 年ほど前の話ですが！

さて、「造形表現」に「物を作る過程で・・・」を当てはめてみると如何でしょうか？工学部での話題を、保育士養成校に当てはめてみるとともに、それを乳幼児期からの造形表現に当てはめる事ができます。特に「新たな予期せぬ出逢い」はまさしく乳幼児が自らを取り巻く環境に関わる際に起きることで、それは、五感と感覚神経、脳、運動神経の活性化、筋力の調整による様々な表現方法を獲得するプロセスに合致して、「感性」を豊かにすることにつながります。感性は「取り巻く世界に関わり視野を広げていくとともに、内なる自らの世界を広げ深める」という重要な役割を持っています。

生成系 AI の進歩はますます進み、それを否定することはできない未来がやってきますが、その未来を創っていくこどもたちには、誰かに考えることを委ねるのではなく、常に感性を働かすことを喜びとするとともに、自分以外の人の感性と共有し、違いを受け入れながら、相互に肯定する知性を持つことが必須ではないのでしょうか。シンギュラリティが 2022 年であったかどうかは、歴史的な判断に委ねることになりますが、人間と AI が融和する関係で進化するためにも、成長のプロセスにおける「造形表現」の役割は今後ますます重要になるものだと考えています。

いずれ来るであろう AI を友として、求められる速さや効率、正確さ、多数決的な正解に縛られず、自らの感性と他の人の感性の違いを受け止め学び、それを楽しみ、迷うことや、悩むことも糧となる社会が生まれることを願うばかりです。

最後までご精読いただき感謝申し上げます。